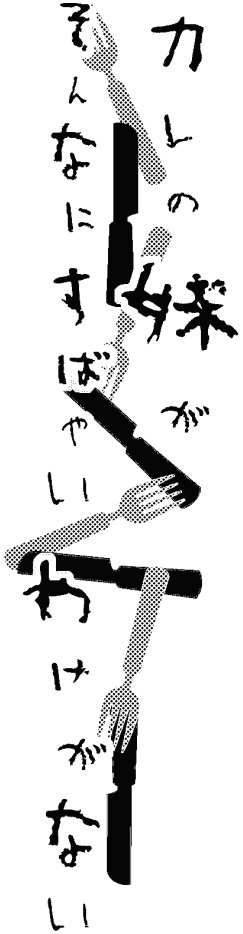

宇多雪待、井崎酒一、土野甲太郎、亀

妹は、どこへ行ったのか。視界の端でしかとらえられない影を感じるたび、彼の頭にはその問いが浮かんでいた。とんっ、とかすかに跳躍音をさせながら、影はいつも彼の視界の外を動き回る。

いつもと変わらぬ月曜日の朝。食卓に着きながら、父が読み終わったであろう新聞を手に取り広げる。

直後、左から硝子の砕ける音。この手の音には慣れたはずなのに、反射的に顔を向けてしまう。単純な視線誘導。案の定、直線的に飛来するフォークは、的確に彼の目の高さ。

体を左に反らせてかわしながら、右手の甲でフォークを打ち落とす。フォークの落ちる音に続いて新聞が鳴る。今日は一段と元気だなぁ、と呆れながら、今度は体を後ろへ。新聞を突き破り繰り出される包丁は、先ほどまで彼の首があった空を切る。

とんっ。大きく破かれた新聞の先にもはや彼を狙った存在はおらず、ただ彼自身の足が見えるだけだった。とんっ。音から判断するに、今朝の攻防は終わり、影は遠くへ行ってしまったようだ。

学校へ行く支度を済ませ、行ってきますと告げて玄関を出る。ドアが閉まる前に彼を追って、影も滑り出る。しかし、その姿は彼には捉えられない。あくまで、その気配のみ。

かくして彼はここ三年ほど、妹の姿を見ていない。

どうして妹はいなくなってしまったのか、あの影は何者なのか。彼には、その一切がわからなかった。初めのうちこそ考えたものの、いくら考えても答えは出ず、考えるより受け入れるという結論しか存在していないことに気付いてしまったのだった。そして、今の彼はその生活にすっかり慣れてしまっている。眼球を狙うフォーク、頸動脈に至ろうとする包丁。そんなものが、もはや日常における風景の一角に成り下がるほどに。

最初は影も慣れていなかったのかフォークが窓を貫通するだけで彼まで届かなかったり、包丁が頸筋を狙った筈なのに大きく脇を逸れて行ったり。しかしそれは彼も同じで、避け損なっ

た切り傷が大量に出来たりしていた。有るときは包丁を止めようとして掌に今も残る切り傷を作ってしまったり。

最近はもう慣れたものだが。この風景すら日常化させてしまう慣れとは怖いものである。

彼が帰宅すると窓は父親により修繕され(ガムテープによる簡単な補修である。いちいち業者などを読んでいたら日常的に窓が破壊されるこの家では生活費がもたない。父親の修繕スキルの高さと気苦労がうかがわれる)、朝と殆ど変りの無い状態になっていた。変わった所と言えば窓のガムテープが増えたのと、

あの影の気配がする、という事ぐらいであろうか。

彼は少なからず驚いた。それもそうであろう。今までこの時間帯に影が出現した事など無かったのである。しかも、攻撃してくる気配も無しに。

日常と違う、その気配は彼を好奇心を誘い、最近薄れつつあった影への興味を再燃させる事となった。

しかし、好奇心は猫をも殺す」、彼の興味は自身の寿命をも縮めるものであった。

彼の長い、そして最期となる放課後が、始まろうとしていた。彼と影の長い関係の終焉とともに。

夕食を終えるとすぐ、彼は父親に影の気配がすることを伝えた。父親は昔からそれを感じることができなかったが、あれだけ日常的に刃物が飛び交う環境に身を置いているにも関わらず、掠り傷一つ負った試しがないあたりを鑑みるに、初めから攻撃対象とはみなされていないのだ

ろう。とはいえ息子の一大事、今までにない不穏な空気を感じ取った父親は、眉を顰めて大きく息を吐いた。

「そうか、遂に……夜になって出てくるのは初めてなのか？」

「というか、今までも朝方や日中ばっかりで、夕方以降は滅多に気配を感じなかったんだけどね。日が暮れてからは、ほんとに初かな」

勘弁してくれよな、お前にまで先立たれたら俺は正真正銘天涯孤独、捨てられたうさぎさんの如く寄せては返す寂しさに打ちひしがれながら無為に時間を消費して、孤独死の果てに回覧板が回ってこないのを不審に思ったお隣に変死体を発見されて地方紙の三面記事を飾る様な余生を送る羽目になるんだ……これ以上、俺から生きがいを奪わないでくれ」

「働けばいいだろ無職」

「ちゃんと日曜大工してるもん」

「それは趣味だよ！」感謝はしてるけど、と彼は付け加える。

「それに、俺は本気だ」

「え？」ぴり、と。空気が急速に冷えていく様な。

「親父……何か、知ってるのか？」

「……我が息子よ、そろそろ全てを話すときが来たらしい」初めて聞く低く重々しい声で、彼の父親はそう言った。

「あの影はお前の妹だ」

はじめて夜におにいちゃんに会いにいこうとおもう。とてもたのしみ。おにいちゃんの邪魔はしたくないけど、今まで我慢してたもん、少しはごほうび、もらっちゃってもいいよね？これでもっとずっといっしょにいられるの。わたしの大切なおにいちゃん。わたしがもうすこし大人になったらふたりっきりで暮らそうね。どこか遠いところで、ちいさなおうちでもわたしはおにいちゃんがいればそれだけでいいよ。こどもは合せて何人欲しい？　どきどきするよおにいちゃん。ちょっと怖いけど、そういうのも大事だもんね。おにいちゃんのためならがんばれるもん。

目も。口も。鼻も。眉も。耳も。唇も。声も。睫毛も。額も。指も。肌も。喉仏も。背中も。鎖骨も。爪も。お尻も。性器も。声も歯も髪も血も涙も唾液も骨格も筋肉も思想も〇〇も××もぜんぶすべて何もかも一切余すところなく完璧にどうしようもないほどおにいちゃんがすき。

どうしよう、もう待ちきれないよ。きのうおにいちゃんのゴミ箱からもらってきたティッシュ、さきにちょっとだけたべちゃうね。

すきすきだいすき愛してる。どうしてはなればなれなの？

ああおにいちゃん、ほんとうに、ほんとうに—

「『食べちゃいたいくらい可愛い』」父親は厳しい表情を崩さずに話を続けている。流れる様に言葉が出てくるあたり、前からいつかは話をしようと思っていたのだろう。

「ってあるだろう？あれが比喩にならない人っているんだよ。ものの例えでもなんでもなく、ほんとうに相手を食べることがそのまま愛情表現っていう人達が。屈折した異常行動だとかカ

ニバリズムがどうとかそんな下らない話じゃない。そいつらにとっては疑いようもなく、それが最高のアイ・ラヴ・ユーなんだよな」

「……それが俺の妹だって？」そういや包丁やらフォークやら、凶器はそんなのばっかりだったな。どこか上の空で、彼はそんなことを思う。

「あいつだけの話じゃないさ。俺の嫁……つまりはお前の母さんだな、もその母親も、その前も……あの一族の女系はみんな潜在的に、食べて愛情を伝えたい、という願望を持って生きている。一向に性質が変わらないところを見ると、よっぽど濃い血なんだろうな」突然の事実に熱を帯びて溶け出しそうになる頭で、彼は消える前の妹に関する記憶を辿ってみた。幼かった妹は今、中学生になっているだろう。

「ちょっと待て。それってつまり、妹は」

「お前のことを愛しているよ、一人の異性として。それに気付いた俺は、母さんに妹を預けたんだ。精神的に大人になれば、自分で衝動を抑えることもできる様になるんだが……まさか、ここまで執着してると思わなかった」そこまで一気に話して、父親は大きく息を吐いた。

妹は彼を愛している。そして彼を食べることを望んでいる。

この三年間、狩られる立場だったのかよと、彼は複雑な気持ちになる。

しかも相手は実の妹だ。父親が今まで黙っていたのも仕方ないだろう。

と。

次の瞬間、夥しい数のフォークが彼の眉間目掛けて突き刺さろうとした。彼が食卓に並んでいたフライパンで咄嗟に顔を庇うと、推進力を失ったそれらは跳ね返ってテーブル上に散乱した。

どうやら今夜、妹は勝負を決めるつもりらしい。

「ちょっと外、出てくるよ。決着つけてくる」

「二人で大丈夫か？」父親の言葉に大きく頷いて、彼は飛来するナイフや包丁を叩き落しながら外出の準備を整えた。なんてったって三年ぶりの再会だ。少しくらい身綺麗にしておくべきだろう。

「じゃあ、行ってくるから」そして彼は家を出る。全てを知った上で、世界でたった一人の妹に会いに行く。

「どうして母さんと結婚したの？」部屋を出る直前、最後に彼は尋ねた。

「愛してるからに決まってるだろ」父親は答えた。

「あいつに殺されるなんて、そんな素晴らしいことはないさ」

「ちょっと危ないよな、そういうのって」

「そうか」

「訂正しないんだ？」

「訂正するなら、『かなり危ない』になる」

彼は少し口元に自嘲的な笑みを浮かべた。

「それはそうだ。かなり危ない」

彼がドアをあけると、どこにでもいそうな少女がそこにいた。どこにでもいそうなのに、そういう目でよくよく見てみると、ホットパンツや小さなハンドバッグは身動きがとりやすそう

なものを選んである。でも、彼は、そうは思えなかった。だからそこで意識を一瞬止めてしまった。

「おにいちゃん」

そのひと言で、その声色で、息遣いで、目つきで、その女は彼の生きている世界のものさしで測ることの出来ない人間だという事、そして即ち妹であるということに気付く。

言い終わった時には既に包丁は彼女の手を離れ、彼目掛けて飛んでいた。一瞬反応が遅れた彼は、間一髪で避けたものの、包丁が彼の服に突き刺さり、彼の体はドアに文字通り釘付けとなる。

「ひさしぶりぃ！ おとうさんからおはなしはきいたかな？ あのね、ええとね、あはは！ きいてもどうしようもないよね」

「どうしようもない？」

「だって、あたしおにいちゃん食べたいの。そのために来たの。お兄ちゃんを食べちゃうと明日からおにいちゃんのこと殺しにかかれなくなっちゃうけど、でも、たべたいのー。だってあたし生まれてからずうっと我慢してたんだよ？ なのになんでこれよりもっと我慢させるの？ そんなのもうイヤなの！ ね、おにいちゃんあたまいいからわかってくれるよね。それともおにいちゃん、ティッシュ美味しかったから許してあげるけど、あんな脳味噌に蛆がわいているような変な女がすきなんだから、やっぱりあたまおかしいの？」

「俺、あっちゃんを死ぬほど愛してるから」

「いくらおにいちゃんでもおこっちゃうよ、あたまおかしいよ！」

彼は彼女のみぞおちに力いっぱい蹴りを入れた。彼女は（一応）少女である上、今まで一方的に攻撃する側だったからか、簡単にその身は地面に叩きつけられた。彼は刺さった包丁を回収し、彼女を地面に押さえつけ、首筋に包丁を当てた。

「そっちの方向ではおかしくないよ。俺は誰かの事すきになったら別に食べたくないし。いや、『食べちゃいたいくらい』っていう形容はしょうもない話を男友達とするときとかするけどさ。でもふつうはそうじゃねえの。

それにね、普通は兄弟間で好きになるとかないの。兄弟なんてのは良くも悪くも互いのことを知りすぎてるじゃん、言ってる意味わかる？ それは生活を共にしてきたって意味もあるけど、それ以上に血縁的に自分に似てる兄弟、兄弟に似ている自分、自分と他人が入り混じって気持ちが悪い事になってる。そういう歪んだ存在が兄弟なの。なんでお前のことをすきになれるんだよ。三年間殺されそうになり続けたメリットは、父親の日常大工が就職できるレベルになりつつあることだけだよ。ここで俺が死んだら、その父親がうさぎちゃんばりに泣いて泣いて生活して、寂しさのあまり死ぬんだよ」

「おにいちゃん、お父さんすき？」

「家族愛だよ。お前のいうすきじゃねえよ。気持ち悪いな。あとな、あっちゃんを変な女呼ばわりすんのは本気で許さねえ」

「でもおにいちゃん、許さないって言ってもおにいちゃんはあたしのこと、殺せるの？」

彼は、はっとした。

彼は良くも悪くも常識的な社会に生まれ、三年前まではその範疇にいたのだ。

殺してくれて、その上食べてくれるならそれはそれで嬉しいけど、できるの？」

できるわけがない。
彼の思考はそうだ。だけれども、彼はもう全てを終わらせるために外に出たのだ。でも、全てを終わらせるからって、文字通り殺してしまうのはどうなんだろう、それでは彼はもとの安穏とした生活には帰れない。しかし、彼が安穏とした生活に帰るには、彼女がいなくならなければならない。彼の頭の中をいくつかの手段が渦巻いた、しかしそれは彼自身で否定できるほど浅はかな考えでしかなかった。
「ねえ、食べてよー」
このヘタレと妹が叫ぶ、黙ってくれと彼が更に大きく怒鳴った。最早その声は震えていた。きっと、彼自身も人を殺すのが怖いのだ。
「じゃああたしがおにいちゃん食べちゃうよ」
「それは絶対駄目」
「けーちー」
妹は彼の腕を力強く引き剥がそうとし、彼はそれに対抗する。暫く妹は彼の腕を押し続けていたが、ふっと力が抜けた。油断をしたら包丁を奪われるであろうことは予測がついていたのか、彼の手からは力が抜けなかった。
「あのね、おにいちゃん」
妹はまっすぐ彼を見る。
「あたしね、おにいちゃんとずっといっしょにいたいだけなの。だってかんがえてみてよ。このままだったら、きっとおにいちゃんは学校にいって、そのときあたしじゃない女の人にあって、すきになったり、嫌いになったりするんでしょ？ あたしじゃない女の人に強い感情を持つ

んでしょ？ そんなの、あたしいやよ。あたしはずっといっしょにいたいの。おにいちゃんのきもちをその女の人が持っていったらかなわなくなるじゃない。ねえ、もしあたしがおにいちゃんをたべたらね、おにいちゃんとあたしはずっといっしょなの。そりゃ、おにいちゃんの肉体はそとに出ちゃうよ。でも、おにいちゃんはあたしの身体とか血になって、ずっとあたしといっしょにいられる。
あたし、ずっと我慢してきたの。ほんとうだよ？おにいちゃんにあいたくてあいたくて、ずっと。そろそろわがままばっかり言わないで、あたしのおねがいも聞いてよ。おにいちゃん、あたしはおにいちゃんがだいすきなの、おにい」
彼の腕が真っ直ぐ妹の喉もとに振り下ろされた。気管に空気が入る音がする。白目をむいて、体は痙攣を始めた。彼は、いたって冷静にそれを見ている。
明らかに何かが外れた男が、それ、と化したものを静かに見ていた。
なんかさ、それならますます殺されたくないんだ。聞こえてるかわかんないけど、遺伝なんだよ。結局。俺もかなり危なくて、『殺されても良いくらい愛してる』とか『死ぬほど愛してる』とか言えちゃうタイプでさ」
包丁を抜くと血しぶきが上がった。鉄臭い匂いが広がるが男の顔に戸惑いは浮かばなかった。
俺ね、あっちゃんに殺されるのが夢なんだ」
男は、笑っていた。